二〇二〇年一〇月三〇日

秋晴や狼煙の立ちし先は海　凡士
着水の大き波紋や初鴨来　みきお
秋冷やビルの煌めき川に散る　凡士
紅絹色の爆ぜんと孕む檀の実　む べ
ふと匂ふ金木犀に足止める　あられ
泡立草天下取りたる遊休地　素秀
青空に鋏の音や松手入　満天
幼な手の押さえし鉢や薯蕷汁　もとこ
手水舎に沈む銅銭水の秋　みきお

二〇二〇年一〇月二九日

我が街の駅前ピアノ秋惜しむ　たか子
かりがねを間遠に聞くや夜具の中　素秀
秋うらら墳丘に座しにぎり飯　やよい
日の深く射して五箇山冬支度　凡士
風となり野を駈けめぐる芒かな　みきお
こすもすの揺れてこの里優しうす　たか子
捨てがたきものも断捨離冬支度　もとこ
元気よと遺影の夫に胡桃置く　む べ

二〇二〇年一〇月二八日

角曲がるまで見送りぬ秋の夕　宏虎
太刀魚の釣られて光る夕の波止　豊実
墳丘へ急勾配や天高し　やよい
落ち葉掃く音に微塵も湿りなし　たか子
茅屋根を隠す銀波の芒原　はやと
朝霧に鬣濡らす牧の馬　智恵子

二〇二〇年一〇月二七日

身じろがす亀甲羅干す草紅葉　ぽんこ
天平の仏の笑みや菊日和　凡士
たたなはる嶺々を遥かに鳥帰る　宏虎
ペンキ塗りたてと札立つ秋日和　明日香
日向ぼこ仲良く寝まる猫と犬　なつき

二〇二〇年一〇月二六日

陶工の手先の反りや秋灯下　なつき
捨て置きの五右衛門風呂や雁渡し　うつぎ
マグマ噴き出すや燃ゆる曼珠沙華　明日香
広縁の障子の影は吊し柿　はやと
廃線の隧道抜けて渓紅葉　凡士
幟立つ旧街道の落花生　智恵子

二〇二〇年一〇月二五日

鳴き砂の浜をたもとほる秋思かな　凡士
七五三玉砂利を踏む三世代　みきお
地蔵堂若木ながらも木守柿　なつき
秋晴やよちよち歩き万歳す　満天
海峡の町沁みわたる夜の霧笛　凡士

二〇二〇年一〇月二四日

コスモス田麓の農家浮かばせて　うつぎ
秋嶺の起伏を駈ける雲の影　たか子
五箇山の縄もて縛る新豆腐　凡士